

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01298

研究課題名（和文）料紙分析の手法による中国古文書学の基盤構築とその応用

研究課題名（英文）Fundamentals and developments for Chinese diplomatics based on an analysis of historical papers

研究代表者

小島 浩之（KOJIMA, Hiroyuki）

東京大学・大学院経済学研究科（経済学部）・講師

研究者番号：70334224

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本古文書学の先行事例に基づき、中国古文書の料紙について、外形・表面観察、形状測定、顕微鏡観察から各種の定量・定性データを収集した。うち定量データはより客観的で検証可能であるため、中国古文書学の様式論や形態論に基づく伝統的な研究手法を補完し得る。今後の中国古文書研究並びに中国古文書学の体系構築には、こうした紙の調査から得られたデータ分析というミクロの視点と、文書体系の背景にある理念や制度的枠組みの解明というマクロの視点、この両者を融合して議論を進める必要がある。この目的の達成のために、本研究ではフランス国立図書館を中心に、国内外で文書料紙調査を実施し基礎データの集積に努めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中国学におけるこれまでの料紙研究は、典籍研究や古写本研究の延長上にあるものが主流を占めていた。これに対して本研究では、古文書学の体系構築を射程に入れて調査を企画した点で新しい試みであった。COVID-19や国際紛争、代表者の病氣療養などから調査は当初計画通りには進まず、得られた成果を中国古文書学の体系に位置づけるまでには至らなかった反面、文書の内容、文書の用途、文書の機能、紙の種類を連関させて研究することの重要性について一石を投じることができた。また、オンライン講座やデジタルミュージアムを通じて研究成果を一般にわかりやすく発信したことで、世界史的視野からの紙への理解を促す役割を果たせた。

研究成果の概要（英文）：In this study, based on the precedent of Japanese diplomatics (paleography), we attempt to gather various quantitative and qualitative data on the paper of Chinese historical documents by means of 1. organoleptic observation, 2. measurement of physical quantities, 3. optical observation. Quantitative data is more objective and verifiable; thus, this can complement traditional research methods based on the theory of Chinese diplomatics (paleography). Future research on Chinese historical documents and the systematization of Chinese diplomatics require a fusion of micro and macro perspective research. The former is the research based on the analysis of data obtained from such paper surveys. The latter, on the other hand, refers to the clarification of the philosophy and institutional framework background of the historical document system. To achieve this objective, we tried to accumulate basic data by paper surveys in Japan and abroad, mainly at the Bibliotheque Nationale de France.

研究分野：東洋史学

キーワード：中国古文書学 料紙分析 敦煌文献 トルファン文書 群際接合

### 1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこの20年ほどの間、日本古文書学や文化財科学などの分野における古文書料紙の調査や復元実験に参画して研鑽を積んできた。その結果、史料の文字情報にモノとしての情報を付加することで、史料が本来有するポテンシャルをより多く引き出すことができることに気が付いた。そこでこうした手法を中国史研究に応用するべく、国内に伝世している中国の古文書類を調査し、方法論的にはひとまずの結着をみた。また紙が地域性、時代性という二つの座標軸の中で用途、機能などの複数の変数によりその位置づけを変えていることを見出したが、こういった料紙調査に基づく様々な仮説を立証するためには、質的に確かな資料を量的にできるだけ多く調査する必要があると痛感した。これらが本研究の着想に至った直接の契機である。

従来中国古文書学研究では、料紙など資料がもつモノとしての情報を等閑視してきた。これは、原文書が多地域に散在して公開も進んでおらず、研究者が文書にアクセスできる環境が長らく未整備であったからである。一方で料紙分析の歴史は、20世紀初頭の植物学者ヴィーズナーによるスタイン発見文書の破壊的分析にまで遡る。その後提唱された料紙分析法は、鑑識眼や技術などの個人の主観や能力、施設・設備への依存度が大きく、歴史研究者が原文書を調査する方法としては適当なものとは言い難かった。かつ高価で大型の撮影・測定機材は、専門技術や専用の研究室を必要とし簡単に持ち運べず、歴史研究者が文字以外の情報を手軽に調査・分析する手段もなかったのである。

しかし1990年代以降、機材の小型化・軽量化の進展と、デジタル技術の発達から、小型光学顕微鏡による繊維観察やCCDカメラを接続した繊維写真撮影が可能となった。現在ではこれらの機材を調査に帯同し、非破壊で料紙の光学的観察を行うことができるようになった。このため日本古文書学においては、料紙分析や復元実験からの紙種比定が、史料に記録される紙の名前(歴史的名称)と、風合いなど研究者の感覚や経験則のみに頼った料紙研究からの脱却を促した。

現在では中国の典籍や古文書についても内外で多くの料紙分析の観点からの成果が生み出されつつある。しかし、先行研究では、たとえば典籍と古文書の紙を同一の俎上で議論するなど、紙の用途や機能を考慮しない分析であったり、特定の文書やコレクションへの個別分析に偏重したりするなど、議論が古文書学全体に及んでいない。そもそも中国学の世界では、古文書を用いた歴史研究はあっても古文書学の確立をみななかった。中国では2010年より中国社会科学院に古文書研究班が組織され、中国古文書学の体系化への取り組みが始まっている。しかし中国人の古文書研究は、伝統的な文献学研究の影響を受けた「文字」への強いこだわりから、料紙などのモノに関する議論は低調である。このため料紙研究もあくまで典籍研究や古写本研究の延長上にあるものが多く、古文書を正面から取り扱ったものは少ない状況にあった。

### 2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、古代中世の中国古文書に対し、料紙分析の手法を用いて繊維や填料(添加物)の観察と顕微鏡写真の撮影を行い、料紙の物理量測定や、製作痕等の観察結果を定量化する点にある。第二には、これらの定量データを集積し、紙の製作・使用・名称等に関わる編纂史料の記述、原文書の内容や形態・形式と対照する。その上で、紙を多面的・総合的に分析し、古文書料紙の相対的な前後関係、紙種と用途の相互関係などを明らかにする。

本研究では、定量データの客観性と検証可能性に着目して、古文書から得られた情報を定量化して分析・研究し得るための基盤整備とそれを応用した個別研究を行う。

### 3. 研究の方法

本研究の調査対象は、中国古代中世の古文書に加え、比較対照として同時代の中国の古典籍・古写本、さらには日本・東南アジアの古文書・古写本・古典籍にも及ぶ。調査では、古文書学の様式論や形態論に基づく伝統的な手法に加え、日本古文書学の先行事例に基づき、研究代表者らが改良した以下のような項目に従い調査をとる。

外形・表面観察	紙種や品質、抄紙工程に関わる情報(簀目・紗目・糸目)および乾燥工程に関わる情報(刷毛目・板目・壁目)の観察
形状測定	料紙の厚み・重量・法量の測定と坪量(紙の容積)・密度の算出
顕微鏡観察	光学およびデジタル顕微鏡を用いた繊維・添加物の観察・撮影

このうち に属する調査項目は、文書料紙について、目で見ると、触ると、調査者の感覚機能により観察した結果の記録である。紙の表面には、抄紙の際に使われた簀や紗、布などの痕跡、乾燥工程における板や土壁などへの痕跡(張り痕)、皺を伸ばすための刷毛の痕跡などが見られるため、これらを観察して記録する。 では、法量、重量、厚みなど料紙の物理量を測定・記録する。

では顕微鏡やカメラなどの各種光学機器を利用した観察を行い、繊維や添加物の写真撮影を行う。このうち、 は測定機器によりそのまま数値として算出できるが、 による判断も客観性と検証可能性を担保するために、可能な限り定量化する。たとえば抄紙工程の情報は、抄紙時の

簀を構成する葦や竹での簀の1寸あたりの数(簀目)や、簀を編んだ糸の間隔(糸目)など単位あたりの量として記録する。紙は商品や情報伝達媒体として移動する上、原料に古紙が含まれることも多いので、繊維観察のみでは地域差や時代差を捨象した評価・分析になりかねない。このため、の定性的部分も十分に考慮したデータの取得と分析が必須となる。このように全て非破壊で、視認や手触りなどヒトの感覚機能によって繊維の状態や製作時の痕跡を観察し、物理量を測定・算出したのち、顕微鏡を利用した観察・記録を行い、観察者の判断による主観的データと、機器を使用した測定による客観的データを突き合わせて定量的に分析する。

#### 4. 研究成果

本研究では計画段階において、国内外に所蔵される中国古代・中世の古文書料紙について、可能な限り網羅的に調査を行う計画をたてていた。本研究のように定量データを中心に据える研究では、母集団をできる限り多くかつ広範囲に設定することが重要となる。このため、当初の予定では、当該時期の古文書について量的に多くを所蔵し、かつ研究代表者および研究分担者とコネクションのある欧州を中心に、海外調査を充実させる方向であった。候補先はイギリス、フランス、ドイツ、フィンランド、ロシアの5か国7機関であり、このほかアジアでは中国・ベトナムについてもいくつかの機関と予備的な交渉を行っていた。国内については、敦煌文献と吐魯番文書の所蔵機関を中心に、関係する日本古代・朝鮮・ベトナムの文書・典籍を所蔵する機関についてもリストアップしていた。

しかし、本研究が採択される直前にCOVID-19によるパンデミックが世界を襲い、採択当初から、国内・国外ともに移動が制限され、資料調査したいが困難な状況が続いた。COVID-19第5波が落ち着いた2021年11月に、万全な感染症対策を講じて国内調査を試験的に実施したが、2022年に入ると第6波としてオミクロン株が流行し、再び調査自粛を余儀なくされた。その上、2022年2月にはロシアのウクライナ侵攻が始まり、渡航可能な地域が限定され、その後の物価高騰や長期的な円安など、社会的・政治的・経済的すべての点において海外調査に不利な状況となった。国内の図書館や博物館での調査においては、パンデミック終息後も調査者の人数や調査の時間などに厳しい条件が課されるようになり、調査そのもののハードルが上がってしまった。これは現物資料の調査が必要不可欠であり、特に欧州に所蔵される敦煌文献・吐魯番文書の調査が欠かせない本研究にとって、致命的な状況であった。また、研究代表者が病氣療養ため、2022年度後半から2023年度前半まで研究体制を縮小せざるを得なかった。

以上のような状況から本研究プロジェクトは2020年度、2021年度、2022年度いずれも繰越制度を利用して必要な手続きをとるなど、柔軟な対応を試みた。

海外調査については、フランス国立図書館(BnF)所蔵の敦煌文献に調査対象を絞ることとした。これはフランスがロシア・ウクライナ紛争の直接的な影響を受けておらず、必要な手続きをとれば調査の許可が下りやすい環境にあったからである。BnFでの調査は2022年9月、2023年6月、2024年3月の計3回実施した。

第1回および第2回の調査は、研究代表者・研究分担者・研究協力者の共同で行った。第1回調査はBnFが所蔵するペリオ将来敦煌文献の中から、古文書に加えて各時代の料紙の指標となり得ると考えられる仏典も含めた49点を調査し、中国古文書を定量的に分析するための基礎データを得た。帰国後のデータ整理において、数値に矛盾や疑義のあるものを洗い出し、これらは第2回調査において再調査の上でデータを補正した。また第2回調査では24点の文書や典籍について新たに調査した。第3回調査は、第1回調査および第2回調査データを分析した上で、再調査もしくは再々調査が必要だと判断されるもの28点について、研究代表者が実施した。BnF以外では、研究代表者が台湾故宮博物院、台湾国家図書館に関連する中国古籍の熟覧調査を行った。

国内調査は、前述したように2021年11月に調査方法を研究チーム内で共有する目的も兼ねて実施したほか、2023年12月にはトゥルファン文書およびBnF所蔵の敦煌文献とおおむね同時代の日本古代の仏典や写本について料紙調査を実施した。いずれも研究代表者・研究分担者・研究協力者が参加した。

さて本研究の主眼は既述したように、「定量データの客観性と検証可能性に着目して、古文書から得られた情報を定量化して分析・研究し得るための基盤整備」にあった。定量分析においては母集団の量や質が決定的な意味を持つ。今回の調査した資料はいずれも質的には問題のないものであるが、COVID-19や国際紛争、代表者の病氣療養などから十分な量を調査する機会を確保できなかった。このため、定量データを用いて中国古文書を総合的に分析できる段階への到達には至っていない。そうではあるものの、BnFでの料紙調査からは以下のように今後の研究の進展につながるような知見も見出された。

すでに多くの先学から、BnFの敦煌文献には、薄絹で両面から補強(ラミネート)してあるものが多く、これが文字の解読を妨げていることが指摘されていた。料紙調査においてもこの影響は大きく、顕微鏡で薄絹の織の隙間から料紙の繊維を観察せねばならず、かつ料紙と薄絹の間の接着剤が視野を妨げるため非常に観察しづらかった。このため繊維種の同定が困難であるものが一部あったものの、基本的に主たる使用繊維は楮系もしくは

は麻系だと考えられる。

紙の密度は、繊維の種類によっておよその数値が定まっている。このため紙の密度は紙種同定のための傍証データとなり得るが、で述べたような補修のある資料では正確な密度を算出することができない。僅かに残る初(うぶ)もしくは初に近い楮紙の多くは楮の密度としては高い数値となっており、これらの紙には打紙(うちがみ)が施されていた。打紙とは繊維を叩いて潰し平滑な紙に仕上げる加工のことで、これにより紙の密度は上がるため、調査で得られた数値としては理に適っている。ただし、打紙されるのはどういった用途に使われた紙であるのか、打紙の技術は日本と同じなのか、加工はどこでなされたのか、といったような問題は今後、十分に検討されなければならない。

料紙を透過光で観察することで、古布や糸くずなどが確認できることがあり、主たる繊維種の確定に大きく役だった。こういった紙は従来の研究ではラグペーパー(古布紙)とされている。しかし、そもそも麻紙は古布から作ることを前提とする場合が多い。すなわち麻の古布が原料となっている紙は、ラグペーパーでもあり麻紙でもある。つまり、紙によっては紙種名が必ずしも主たる繊維種を表しているわけではないから、データの標準化や先行研究との比較においてこの点は十分に考慮する必要がある。

長安宮廷写経と考えられる古写経の料紙は、薄くて平滑であり、簀目・糸目といった抄紙時の痕跡や、刷毛目などの乾燥時の痕跡がみえにくく、密度の高い引き締まった紙であった。この点同じ仏典でも官文書の故紙を利用したものは全く異なっている。前者が最初から宮廷写経の専用用紙として漉かれたものであるのに対して、後者は元来、官文書の用途を前提として漉かれた紙である。つまり、同じ仏典だからということで両者を同一の俎上で議論するべきではなく、後者は官文書の料紙として分析・議論を進めなければならない。

また、関連の調査を進めてゆく中で唐代の公文書・私文書の枠組みや、使用される文書と料紙の関係など、中国古代中世の文書体系や料紙のあり方についての知見も深めることができた。その一端として「唐代の公文書と私文書」についての見通しを示せば次の通りである。

唐では文書を「公文」と「非公文」に二分する。公文とは、原則として官府の管理下にあり、かつ原本が官府に保管されているものを指す。公文は大別して王言(聖旨)、皇帝上呈文書、官文書の別がある。このうち、皇帝の直接の判断にかかる王言と皇帝上呈文書は、官文書とは明確に区別されていた。王言と皇帝上呈文書については、前者が詔勅など皇帝の発意による命令を下すものであるのに対し、後者は奏抄など皇帝が官僚からの立案奏上に裁可するものという違いがある。これ以外の官府において生成・保存される文書で、公文の要件を満たすものが官文書なのである。これら公文の文書様式は、歴代の王朝において公式令や文書式などの法典類に規定されていた。ただし、ここに定められた様式は汎用性の高いものを一種の「型」として例示してあるに過ぎず、各官府において必要とされる用途や機能に応じて「型」から準用した様式が、細則や特別則の形で定められていたと考えるべきである。

一方、非公文とは公文の要件を満たさないものであり、国家の法典類ではなく書儀と呼ばれる公私文書の様式・文例集に規定されていた。これらの中には、使い方により公私どちらの文書にもなり得るものが含まれている。たとえば、表・状・牋・啓は上申文書として、政治・行政・儀礼など様々な場面で活用され公的側面が強いものの、発信者が官僚個人であって原本が官府に存在しないことから非公文に位置づけられていた。ただし、これらが上奏に使用され、皇帝の裁可を経て命令として施行されたりすると、皇帝上呈文書の原本として官府に保存されるため公文となった。また、出土文書からは地方行政における上申文書としての状の利用が広く確認されている。これは発給手続や使用範囲が厳格に定められていない非公文としての状の性質が幸いし、準用しやすかったからだと考えられる。その一方で、状や啓は、個人書簡(書状・啓状)つまり「書状形式文書」の純然たる私文書としても用いられた。このように、原則的には公の側面が強いにもかかわらず、私にも転化し得るものがある反面、逆に私を原則としつつ、時に公へと転化する性格のものも存在した。たとえば、主として個人間の書簡に使われた致書は、代表的な「書状形式文書」の一つであり私文書だと説明されるが、隋以後元まで、君臣関係のない君主間の外交文書としても使われるなど、公の側面が強く押し出される場合もあった。

今後の中国古文書研究並びに中国古文書学の体系構築には、こうした紙の調査から得られたデータ分析というミクロの視点と、文書体系の背景にある理念や制度的枠組みの解明というマクロの視点、この両者を融合して議論を進める必要があるだろう。

このほか、本研究においては社会への当該研究成果の公表、一般への普及活動として、オンライン連続講座「知の継承(バトン)」2021年度第1回講座に協力した。この講座では、研究代表者と研究分担者が研究成果に基づいた講演・対談、一般からの質疑への応答を行った([http://www.lib.e.u-tokyo.ac.jp/?page\\_id=12716](http://www.lib.e.u-tokyo.ac.jp/?page_id=12716))。また、最終年度には、東京大学経済学図書館・経済学部資料室デジタルミュージアムにおいて「ベトナム古文書の世界 : その紙と文様」(<http://lib-dm.e.u-tokyo.ac.jp/>)のデジタル展示の構築に協力した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計33件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 14件）

1. 著者名 小島浩之	4. 巻 15
2. 論文標題 唐代公文書体系試論：中国古文書学研究札記	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中国古代法律文献研究	6. 最初と最後の頁 105-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小島 浩之、矢野 正隆	4. 巻 60
2. 論文標題 漢字・字喃経典への料紙調査の応用	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東南アジア研究	6. 最初と最後の頁 17-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20495/tak.60.1_17	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 片山章雄	4. 巻 2
2. 論文標題 交錯する西域探検家（西域を読み解く第3回）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 K（NPO活動法人Knit-K）	6. 最初と最後の頁 58-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 片山章雄	4. 巻 10
2. 論文標題 日本における初期の中国金石学・木簡古文書学と『西域考古図譜』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 横浜ユーラシア文化館紀要	6. 最初と最後の頁 絵1, 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 片山章雄	4. 巻 56
2. 論文標題 第三次大谷探検隊員橋瑞超の助手ホップズの報道数点	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東海史学	6. 最初と最後の頁 81-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片山章雄	4. 巻 3
2. 論文標題 大谷探検隊における出発の力学 (西域を読み解く第4回)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 K (NPO活動法人Knit-K)	6. 最初と最後の頁 58-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢野正隆	4. 巻 12
2. 論文標題 【報告】紙の誕生と伝播から見る「記録媒体の世界史」：東洋から西洋へ：紙の誕生と伝播から見る「記録媒体の世界史」：東洋から西洋へ オンライン連続講座「知の継承(バトン)」(第1回)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京大学経済学部資料室年報	6. 最初と最後の頁 54-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 本多俊彦	4. 巻 729
2. 論文標題 加賀本多家の「危機」と藤堂高虎	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 石川自治と教育	6. 最初と最後の頁 36-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小島浩之	4. 巻 19
2. 論文標題 オンライン漢籍	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 漢字文献情報処理研究	6. 最初と最後の頁 193-201
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小島 浩之	4. 巻 35
2. 論文標題 【書評】小島道裕・田中大喜・荒木和憲編 国立歴史民俗博物館監修『古文書の様式と国際比較』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アーカイブズ学研究	6. 最初と最後の頁 150-158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32239/archivalscience.35.0_150	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小口雅史, 今井晃樹, 氣賀澤保規	4. 巻 95
2. 論文標題 在欧美術館・博物館所蔵の日本仏教美術を訪ねて(6) : ドイツ・ハンブルク 美術工芸博物館の巻(2) ドイツ・ブレーメン 海外博物館の巻(3)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 法政史学	6. 最初と最後の頁 103-132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片山章雄	4. 巻 55
2. 論文標題 大谷探検隊員と関係者の絵葉書数十点	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東海史学	6. 最初と最後の頁 43-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片山章雄	4. 巻 0
2. 論文標題 大谷探検隊と大谷文書（西域を読み解くプロローグ）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 K (NPO活動法人Knit-K)	6. 最初と最後の頁 42-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片山章雄	4. 巻 1
2. 論文標題 大谷光瑞の渡欧・滞欧と西域熱（西域を読み解く第2回）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 K (NPO活動法人Knit-K)	6. 最初と最後の頁 58-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢野正隆	4. 巻 3
2. 論文標題 「国語」と「漢喃」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京大学アジア研究図書館ニューズレター	6. 最初と最後の頁 5-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森脇優紀	4. 巻 33
2. 論文標題 書評 近代ヒスパニック世界と文書ネットワーク[吉江貴文編]	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アーカイブズ学研究	6. 最初と最後の頁 88-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32239/archivalscience.33.0_88	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤田 励夫	4. 巻 16
2. 論文標題 安南日越外交文書の花押についての試論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 九州国立博物館紀要「東風西声」	6. 最初と最後の頁 19-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田 励夫	4. 巻 224
2. 論文標題 安南日越外交文書の国書について：文書様式を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 267-309
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田 励夫	4. 巻 31
2. 論文標題 安南文書の令旨について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京大学史料編纂所研究紀要	6. 最初と最後の頁 42-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小島 浩之	4. 巻 81
2. 論文標題 唐前半期の泛階と人事政策	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東洋史研究	6. 最初と最後の頁 200-230
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 片山章雄	4. 巻 4
2. 論文標題 第一回探検隊の新疆調査とその前後（西域を読み解く第5回）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 K（特定非営利活動法人Knit-K）	6. 最初と最後の頁 54-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片山章雄	4. 巻 57
2. 論文標題 史料紹介：ロプノール・楼蘭西方孔雀河支流左岸の共同墓地情報(1)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東海史学	6. 最初と最後の頁 61-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田励夫，荒木臣紀	4. 巻 23
2. 論文標題 金峯山寺所有 新出の金峯山寺経塚出土紺紙金字経について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 鹿園雑集：奈良国立博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 33-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小島浩之著，趙師淇訳	4. 巻 17
2. 論文標題 試論《唐六典》的編纂：以《初学記》和《唐六典》注為中心	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中国古代法律文献研究	6. 最初と最後の頁 297-332
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 片山章雄	4. 巻 5
2. 論文標題 第二回探検隊のモンゴル・新疆調査、そしてインドへ（西域を読み解く第6回）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 K（特定非営利活動法人Knit-K）	6. 最初と最後の頁 50-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片山章雄	4. 巻 26
2. 論文標題 唐代史の風景	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 唐代史研究	6. 最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢野正隆・小島浩之	4. 巻 14
2. 論文標題 「景福寺資料」状態調査報告：東南アジア地域資料管理のための基礎データ	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 東京大学経済学部資料室年報	6. 最初と最後の頁 71-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森脇優紀	4. 巻 164
2. 論文標題 文献資料にみるキリシタンの葬送儀礼と墓	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 35-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田 励夫	4. 巻 185
2. 論文標題 「世界の記憶」とは：その目指すものと今回の登録について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 湖国と文化	6. 最初と最後の頁 22-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田 励夫	4. 巻 1
2. 論文標題 文化財を護る仕事：古文書を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 高良山：その歴史と文化 (高良大社機関誌)	6. 最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田 励夫	4. 巻 105
2. 論文標題 文化財を護る仕事：書跡・典籍、古文書を中心に	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 蓮華	6. 最初と最後の頁 39-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田 励夫	4. 巻 19
2. 論文標題 徳隆六年清王鄭令旨について	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 東風西声：九州国立博物館紀要	6. 最初と最後の頁 51-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件（うち招待講演 7件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 藤田 励夫
2. 発表標題 木簡の文化財指定について
3. 学会等名 木簡学会第43回研究集会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yano Masataka, Kojima Hiroyuki
2. 発表標題 Types of Paper Used for Religious Documents in Southeast Asia: A Survey of Writing Papers in Chinese Characters and Chu Nom (Panel: The Transmission and Dissemination of Ma-hayana Buddhist Traditions in Thailand: Significance of the Chinese Vietnamese Buddhist Scriptures in Canh Phuoc Temple in Bangkok)
3. 学会等名 The 12th International convention of Asia schol-ars Kyoto (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小島 浩之
2. 発表標題 東アジア古文書学の構築にむけて：国内所蔵中国古文書調査から
3. 学会等名 明清史夏合宿2021
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小島 浩之, 矢野 正隆
2. 発表標題 料紙調査からみた「在泰京越南寺院景福寺所蔵漢籍字喃本」の基礎的考察
3. 学会等名 東南アジア学会第103回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小島浩之
2. 発表標題 記録媒体の世界史：東洋から西洋へ
3. 学会等名 オンライン連続講座「知の継承(バトン)」2021年度第1回講座
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小島浩之, 森脇優紀
2. 発表標題 歴史史料をモノから読み解く：何に情報を記すのか
3. 学会等名 オンライン連続講座「知の継承(バトン)」2021年度第1回講座
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小島浩之
2. 発表標題 シンポジウム『東アジア比較古文書学の可能性』各報告へのコメント
3. 学会等名 第66回国際東方学会議東京会議シンポジウムIII「東アジア比較古文書学の可能性」(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤田励夫
2. 発表標題 文化財を護る仕事：古文書を中心に
3. 学会等名 歴史をつなぐ高良山の文化財(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小島浩之
2. 発表標題 公文と私文：唐宋時代の公文書をめぐる理念的枠組み
3. 学会等名 2023年度宋代史研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 片山章雄
2. 発表標題 杉本苑子「幻の『幻の錦』」論その後：大谷探検隊吐魯番収集の「花樹対鹿錦」と法隆寺「獅子狩文錦」
3. 学会等名 東洋文庫内陸アジア出土古文献研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 森脇優紀
2. 発表標題 海外史料にみる日本の紙漉き
3. 学会等名 越前生漉鳥の子紙保存会講演会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 藤田励夫
2. 発表標題 文化財を護る仕事：紙の文化財を中心に
3. 学会等名 妙法院仏教文化講座（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 藤田 励夫
2. 発表標題 東・東南アジアの料紙と典籍・古文書文化財の修理
3. 学会等名 一般社団法人国宝修理装コウ師連盟第27回定期研修会「東アジアの紙文化財の修理」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 藤田 励夫
2. 発表標題 安南(ベトナム)からの国書について
3. 学会等名 国際シンポジウム「日越関係：過去・現在・未来」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 藤田 励夫
2. 発表標題 文化庁京都移転とこれからの文化財行政
3. 学会等名 滋賀県文化財保護連盟総会(招待講演)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計11件

1. 著者名 河内祥輔, M・メルジオヴスキ, E・ヴィダー	4. 発行年 2021年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 272
3. 書名 儀礼・象徴・意思決定	

1. 著者名 荒川正晴, 佐川英治, 鈴木宏節, 辻正博, 岩尾一史, 桃木至朗, 戸川貴行, 李成市, 富谷至, 下倉涉	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 322
3. 書名 中華世界の再編とユーラシア東部 : 4-8世紀	

1. 著者名 辻正博	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 386
3. 書名 中国前近代の関津と交通路	

1. 著者名 千田大介, 小島浩之, 上地宏一, 佐藤仁史, 田邊鉄, 二階堂善弘, 師茂樹, 井黒忍, 小川快之, 菅野智博, 佐々木愛, 佐藤信弥, 塚本鷹充, 野原将揮, 村松弘一, 森巧, 矢野正隆, 吉川龍生	4. 発行年 2021年
2. 出版社 好文出版	5. 総ページ数 572
3. 書名 デジタル時代の中国学リファレンスマニュアル	

1. 著者名 小口雅史, 石田実洋, 井上亘, 荊木美行, 磐下徹, 榎本淳一, 大津透, 小倉慈司, 片山章雄, 辛嶋静志, 藏中しのぶ, 佐藤信, 須原祥二, 辻正博, 野尻忠, 春名宏昭, 堀内和宏, 吉永匡史, 渡辺晃宏	4. 発行年 2020年
2. 出版社 同成社	5. 総ページ数 410
3. 書名 古代東アジア史料論	

1. 著者名 大津透, 市大樹, 古田一史, 西本哲也, 武井紀子, 山下洋平, 辻正博, 坂上康俊, 丸山裕美子, 吉永匡史, 榎本淳一, 三谷芳幸, 吉田孝	4. 発行年 2020年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 320
3. 書名 日本古代律令制と中国文明	

1. 著者名 社会経済史学会	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 746
3. 書名 社会経済史学事典	

1. 著者名 川村信三, 東馬場郁生, 村井早苗, 清水有子, 大橋幸泰, 浅見雅一, 狭間芳樹, 安廷苑, 森脇優紀	4. 発行年 2021年
2. 出版社 教文館	5. 総ページ数 256
3. 書名 キリシタン歴史探求の現在と未来	

1. 著者名 本多俊彦, 本多真美子, 三島一信	4. 発行年 2021年
2. 出版社 安祥文化のさと地域運営共同体	5. 総ページ数 80
3. 書名 特別展 加賀本多家 : その歴史と至宝	

1. 著者名 藤田 励夫, 佐藤健治, 岡村一幸, 小瀬玄士	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東京大学史料編纂所	5. 総ページ数 188
3. 書名 龍興山大慈寺所蔵史料 : 東京大学史料編纂所研究成果報告	

1. 著者名 氣賀澤保規, 倉本尚徳, 松原朗, 肥田路美, 榎本淳一, 松浦典弘, 速水大, 山口正晃, 小島浩之, 櫻井智美	4. 発行年 2023年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 350
3. 書名 論集 隋唐仏教社会とその周辺	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>オンライン連続講座「知の継承(バトン)」2021年度第1回講座  <a href="http://www.lib.e.u-tokyo.ac.jp/?page_id=12716">http://www.lib.e.u-tokyo.ac.jp/?page_id=12716</a>          矢野正隆, 小島浩之, 大野美紀子「付録 京都大学東南アジア地域研究研究所所蔵「景福寺資料」目録」『東南アジア研究』60-1, pp.58-70, 2022          デジタル展示「ベトナム古文書の世界 : その紙と文様」(矢野正隆編集)  <a href="https://lib-dm.e.u-tokyo.ac.jp/">https://lib-dm.e.u-tokyo.ac.jp/</a>          藤田 励夫「口絵解説 宋版唐人絶句」『日本歴史』903, 2023年</p>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	小口 雅史  (OGUCHI Masashi)  (00177198)	法政大学・文学部・教授   (32675)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	片山 章雄  (KATAYAMA Akio)  (10224453)	公益財団法人東洋文庫・研究部・研究員    (72622)	
研究分担者	辻 正博  (TSUJI Masahiro)  (30211379)	京都大学・人間・環境学研究科・教授    (14301)	
研究分担者	矢野 正隆  (YANO MASATAKA)  (80447375)	東京大学・大学院経済学研究科（経済学部）・助教    (12601)	
研究分担者	森脇 優紀  (MORIWAKI Yuki)  (90733460)	東京大学・大学院経済学研究科（経済学部）・特任助教    (12601)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	藤田 励夫  (FUJITA Reio)		
研究協力者	本多 俊彦  (HONDA Toshihiko)		
研究協力者	高島 晶彦  (TAKASHIMA Akihiko)		

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------